

今号の内容
北部ルソンへの無差別爆撃を弾劾する……P2~6
革命から12年目迎えるニカラグア……P8~12
◆バヤンのアピール……P6~7

1991年
7月1日
第432号
編集発行人 高木一夫
一部 200円

烽火

NOROSHI

共産主義者同盟（全国委員会）

■ 大阪戦旗社 大阪市北区本庄西2-8-19
明豊ビル401号 大労協内
TEL.(06)371-3706
○郵便振替 大阪3-63333 高木一夫
○銀行口座 第一勧銀 515-1058150 高木一夫

運動・90キャンペーンを展開

北部ルソン爆撃に抗議
する住民のデモ▶



BAYAN全国を巡る

カラバルソン計画・北部ルソン爆撃を弾劾する

六月一日からフィリピンのBAYAN（新民族主義者同盟）のボエット氏が「日本人民の運動90」の招請で来日し、全国の市民団体や労働運動団体との交流をすすめている。

今回の来日は、BAYANと日本人民の運動90との連帯協定に基づき、日本人民の運動90のキャンペーンを成功させるためのもので、①日本のアジアへのODAの反人民的な運用に対する反対運動、②フィリピンを初めとしたアジア第三世界におけるアメリカ、日本の支配（軍事同盟、基地）、現地反動政府による人民弾圧に対する抗議行動、人民への連帯行動、③BAYAN呼びかけのピースフェスティバル（九月開催）への支援・援助を課題として設定している。

BAYANは、キャンペーンの中でカラバルソン計画と北部ルソンへの無差別爆撃への抗議を特に強く呼びかけている。カラバルソン計画はミニマール・プランの中心事業として出てきたものでインフラストラクチャー（社会資本）整備を目的としているが、その実体は輸出指向・輸入依存・外資・援助依存というアキノ政権の新植民地主義的な工業化政策を固定化するものでしかない。この中で「開発」という美名の下に住民が住む家を追われ、環境が破壊され、民族の主権が踏みにじられている。さらにこの計画を推進するために日本のODA（政府開発援助）が使われているが、実際は日本資本の進出を支えるためのものでしかない。また、アキノが政権発足の一年後に宣言した「全面戦争戦略」の下で行われている大規模なテロ・略奪・破壊活動は残虐さを極め、その件数、悪質さともにマルコス時代を上まわるといえる。特に北部ルソンでの国軍の大規模な爆撃は深刻で解放区に相当な打撃を与えているといわれ、ある村では村民全員が避難し、洞穴の中での窮乏生活を強いられている。背後には、米帝国主義のLIC（低強度度紛争）戦略が存在する。また、外国からの援助もこの政策を支え、人権侵害に一役買っている。日本が代表的な援助国であることはいうまでもない。

日本人民の運動90は、七月七日に大阪の部落解放センターで行うシンポジウムを初めとして多彩な試みを展開していく。われわれは、フィリピンと日本人民の連帯を政治的、階級的な視点でとらえていこうとする日本人民の運動90の活動に注目し、惜しめない賛意をおくるものである。

全面戦争政策下で進む

フィリピン・北部ルソン 無差別爆撃を弾劾する！

いまフィリピンでは信じられないような事態が起きている。フィリピン国軍による北部ルソンに対する無差別爆撃がそれである。マスコミが黙殺するこの問題を、われわれはフィリピン革命連帯の緊急課題として報告し、抗議の声をあげていくことを訴える。

戦闘機や爆弾で村を徹底破壊

次ページの写真は、フィリピン国軍の爆撃によって住んでいる村をたたき出され、洞窟での生活を強いられている北部ルソン・マラッグ渓谷の農民の家族たちである。

フィリピン、ルソン島北端の山岳地帯に暮らす彼らは、昨年の秋から現在にいたるまで一貫して止むことのない国軍の攻撃にさらされつつけている。

一連の作戦を指揮した国軍司令官の一人、ホーマー・カブロン陸軍准将は、この事件に対するフィリピン人民からの激しい抗議の前に、首尾一貫して「マラッグ谷には民間人は一人もいない」と豪語してきた。しかし、現地からの報告によれば、北部ルソンへの爆撃の実態は、農民の強制移住と徹底した農村の破壊以外の何ものでもない。

悪名高い司令官どもが指揮するフィリピン国軍とフィリピン全国警察軍部隊は、まず戦闘機・武装ヘリコプターによる空爆の嵐を住民の頭上にふりそそぐ。マラッグ谷に続いて攻撃対象となったアブラ州での作戦では、国軍第一七歩兵大隊、コルディレラ地方軍、イロコス地方軍、国家警察野戦隊、首都圏防衛第七二歩兵大隊からなる混成部隊が動員され、このもとに大砲、二機のトラトラ戦闘機、二機のシコルスキー・ヘリコプター、九機の武装ヘリコプターが駆使され、少なくとも本年一月時点で一〇〇個以上の爆弾、八一個のロケット弾、一五〇の砲弾が使われている。フィリピン空軍機の落とした爆

弾によって、二五人の人間がいないと回りが囲めないほどの大きなクレーターができたという。

この爆撃によって農民たちをたたき出したあと、国軍歩兵大隊を中心とした陸上部隊が村々に入り込み、燃え残った家々に放火し、家畜を略奪し、田畑の作物を根こそぎにしていくな。農作業をできなくさせるために鍬や鋤などの農具もことごとく破壊される。同じく一月時点で調査団がつかんだ限りでも二六軒の家が爆撃で破壊され、八八軒以上の家が放火され、一九の穀物蔵が破壊されたという。逃げそこなった住民や、家族のために食べ物などを取りに戻ろうとして発見された住民たちは国軍の手で容赦なくリンチされ、逮捕か、運の悪い場合は殺害されてしまふ。

さらに一連の爆撃は、明確に在比米軍のバックアップ（指揮）のもとに行われている。多くの爆撃のさいに、中部ルソンのクラーク米空軍基地から飛び立った米軍機が低空を偵察飛行し、その後フィリピン国軍の戦闘機が爆撃を開

始する。また投下された爆弾に米軍のマークが付いていることが多くの証言や写真によってすでに確認されている。

強制避難させられた農民たちは、付近の町に入ることを許されず、着の身着のまま、森林の中の掘っ立て小屋以下の「避難所」や洞窟などに追いやられる。たえまない爆撃と国軍の監視のもとでは、畑や山に食糧を取りにいってもできない。食糧もろくになく、薬もない強制収容所同様の生活のなかで、多くの人間、とくに老人や子供たちが次々と死んでいく。マラッグ谷ではハシカが子供たちの間にまん延し、ワクチンがないためにあっという間に八八人の子供たちの命が奪われた。

国軍は避難民の生存のための食糧を極端に制限し、住民を飢え死にギリギリのところに追い詰める。また政府は医療援助や食糧援助を届けようとする救援団などが現地に入ることを阻止しつつおいており、この数カ月のあいだに全国的な抗議の高まりに押されてしぶしぶ二つの人道的な団体による救援団を許可したのみである。

フィリピンでは「マラッグ谷爆撃問題」という名で知られるこの一連の北部ルソン無差別爆撃事件について、われわれはフィリピン革命運動に対する全土的な弾圧のもっとも集中した系統的な攻撃の一つとしてここにレポートし、日本のたたかうプロレタリア兄弟姉妹の国境を越えた反撃と連帯を訴える。

米日に支援された国軍の暴行

カリンガーアバヤオ州マラッグ渓谷で行われたこのサリドゥマイ作戦、ナキララ作戦と並行して、ジヌグドゥンガン渓谷でのレッド・リッブス作戦、さらにアブラ州でのパグスボック緊

急展開部隊による作戦と、名を変え場所を移しながら展開されるこれらの作戦は今も拡大しつつげている。

これら一連の作戦は「一九九二年までに新人

民軍を鎮圧する」とのアキノ政府の宣言のもとで行われている。日米帝国主義の意を受け、新人民軍（NPA）の壊滅を掲げたアキノ政権のもとで、フィリピン全土における弾圧は強化されつつあった。それは「全面戦争」政策と呼ばれる一連の全国的な人民運動への軍事的抑圧の構造である。いわゆる「令状なし逮捕」を合法とするフィリピン最高裁決定、KMP（フィリピン農民運動）ジミー・タデオ議長を始め多くの人民運動のリーダーの不当逮捕、都市におけるBAYAN（新民族主義者同盟）など主要な人民組織の活動家たちの暗殺や誘拐など、これまで以上にフィリピンの先進的活動家たちへの弾圧が激化している。何百人もの有名無名のフィリピン革命家たちが、敵の手にかかって闇から闇へ葬り去られている。最近では中部ルソンのいくつかの村において、小学生を含む一家を生きたままガソリンをかけて焼き殺したり銃殺したりして見せしめにする事件も起こっている。

たしかにフィリピン人民は、これら全面戦争政策はアメリカ帝国主義がベトナムでの敗北の総括をもって第三世界革命鎮圧のために路線化した「LIC戦略」＝低強度紛争戦略のフィリピンへの適用であると暴露する。「アジア人をしてアジア人とたかかしめる」というLICの基本的思想は、フィリピンにおいては徹底した貧困につけ込んだ「反共自警団」ビジランテの組織化による活動家の暗殺、人民闘争内部へのスパイの送り込みから、この北部ルソンに見られる無差別爆撃にいたるまで、もっとも帝国主義的で卑劣かつ残酷なものである。フィリピンで起こっていることは、第三世界の革命運動に対する帝国主義の攻撃としてのLIC戦略のもとで、中南米をはじめとして世界的な規模で進行している事態の氷山の一角なのである。

このような中で、フィリピンではより系統的で直截な反革命的弾圧として、新人民軍の支持基盤をその経済的基盤ごと絶滅しようという一連の解放区破壊作戦が全土を覆いはじめている。北部ルソン以外にもネグロス、ミンダナオ、ビコールなどにおいて同様の作戦が展開され、たたき出された農民たちの数は日に日に増大している。

これらの問題は「国内難民」問題と呼ばれ、日本においては「フィリピン人内部の問題、フィリピン人どうしの対立」として描き出され、日



マラッグ溪谷の悲劇

農村から追い出された
農民たち(本年1月)

本人はあたかも第三者としての立場にあるかのように語られる。それどころか、多くの場合「新人民軍のゲリラ活動さえなければ解消する問題」であるかのように取り上げられる。しかしわれわれははっきりと知るべきである。「国内難民」問題は、決してフィリピン国内問題でなければ、フィリピン人内部でのみ解決されるべき問題でもない。LIC戦略とは、第三世界の犠牲の上に現在の生活の保守を要求する帝本国人民の腐敗を担保として、帝国主義と第三世界の支配関係を未来永劫にわたって固定化していくこととする、帝国主義ブルジョアジーの政治・経済・軍事を含む総合的な反革命であり、それらはまったく反人民的な犯罪に他ならないということこそ、われわれは決して見のがすべきでない。

その意味でフィリピン国軍を前面に立てたこの北部ルソン爆撃の真の責任者・真の実行部隊は、アジア最大の米軍基地をこの国に居座らせ続けているアメリカ帝国主義とその軍隊であり、そしてその軍事基地の維持のための財源を大

く負担する日本という帝国主義なのである。これからも事態が進むにつれ、米軍の指揮・関与に関するより多くの事実が明らかにされるだろう。それはフィリピンにあのような巨大な米軍基地が置かれていることの意味、そして日米帝国主義がフィリピン人民の反対を押しつぶしてまで、この基地を維持していくこととしていることの真の意味を、世界の人民の前に明らかにするものだ。

フィリピン北部ルソンにおける弾圧の現状が示すように、アジアの米軍基地とこれを維持する日本のカネに支えられた日米軍事同盟下で、他国の人民の正当なたたかいを公然と武力鎮圧していくという構造に対して、これを許さない大衆的な決起を広範に生み出していかななくてはならない。自衛隊がともかくも海外派遣され、カラバルソン計画に見られる巨大な日本の経済権益がフィリピンに置かれていく時代に入ったことをおさえるなら、それは決して彼岸の任務ではない日本人民自身の現在の政治的任務なのだ。

労働人民の解放闘争の正義性

フィリピン国防相ラモスは、北部ルソンをターゲットとしたこれらの作戦にあたってこう述べた。「われわれはフィリピン共和国において、

もうひとつの政府の存在を許すことはできない。たとえ小さな村の政府や、一群の村で作っている政府のようなものにすぎなくても」

この言葉は、北部ルソン地方が、敵でさえも「政府」と呼ばざるをえないほどに発達した人民闘争の拠点であり、北部ルソン爆撃の目的がこのような人民闘争の拠点を破壊するためのものであることを鮮明に物語っている。次に北部ルソン地方にどのような人民闘争・革命運動が成長しているのかをみていこう。

コルディレラ人民 のたたかいの歴史

爆撃の舞台となった北部ルソン・コルディレラ地方は、フィリピン有数の人民の抵抗闘争の拠点であり、フィリピン革命の最大拠点の一つである。

そこはフィリピン最大の山岳地帯であり、この山々からは豊かな地下資源（フィリピンの全採掘量に対する割合でいえば、金七三％、亜鉛六二％、銀四六％、銅二三％などを埋蔵すると推定されている）や森林資源が生み出される。またコルディレラの主要な河川でダムが作られれば、フィリピンの電力総需要の五八％をまかなうことができるといわれる。

これらの豊かな資源を略奪するために一六世紀後半に、この地をスペイン植民地支配の大波が襲った。侵略者たちは、この地に住んでいたフィリピンの先住民たちを、宗教対立などを持ち込みその他の地方の人民たちと仲たがいをせ対立させ、山岳地帯へ追いやり、今日にいたる差別と迫害の「少数民族問題」を発生せしめた。

迫害されたコルディレラ人民は、むしろ寒冷といってもよい厳しい自然の中で険しい山の斜面を何世代にもわたって人力に頼って開墾し、美しい棚田を切り開き米を植え、独力で生き抜いてきた。コルディレラ人民はその迫害の歴史ゆえに、のちのスペインからの独立のための革命組織カティプナに多くの志願者を送り出し、革命戦争の果敢な戦士としてたたかった。スペインに続くアメリカ帝国主義支配のもとでは、現在のベンゲット州にある優良な鉱山や牧草地などは、これを先祖伝来の財産として守り育ててきたコルディレラ人民の手から、植民地

法を隠れみゝとして米国企業や多国籍企業にたくみに略奪されていった。

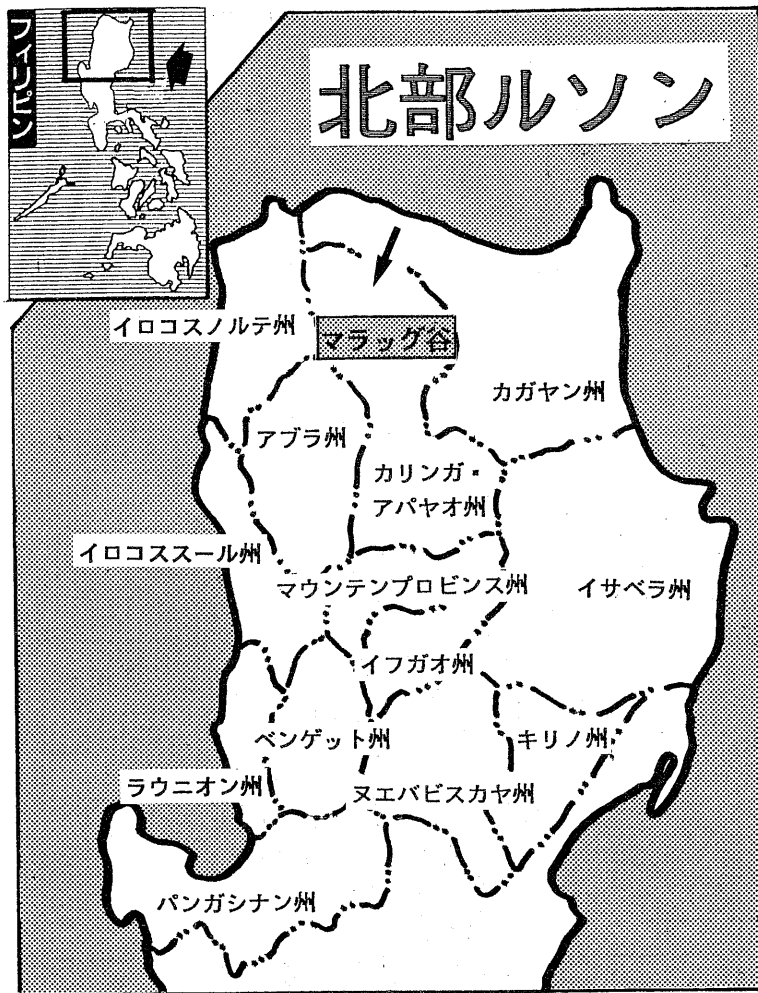
その後、第二次世界大戦の末期にフィリピンを占領した日本の支配—今日フィリピン史に残る残虐な侵略の一時代—のもと、全土に広がった抗日人民軍（フクバラハップ）の闘争を通して、コルディレラ人民は武装して日本軍とたたかった。

戦後の新植民地支配への転換の後でも、コルディレラ人民の土地は一方的に「国有地」とされ、ここに住む人々はまったくの無権利状態に置かれつづけてきた。「奪われた先祖伝来の土地を奪い返せ」というスローガンは、今日でもコルディレラ人民のたたかいの共通のメインスローガンである。もっとも差別され迫害されながらも、コルディレラは実質的に一度も外国の完全な支配下には置かれなかった希有な歴史を有する土地であることを、コルディレラの以上の歴史は示している。

一九六〇年代前半のベトナム反戦闘争の世界的高揚と結合したアメリカ帝国主義への批判的闘争に立った戦闘的學生たちのたたかいを背景として一九六八年フィリピン共産党が再建され、翌年新人民軍が創設されたことは今日よく知られているが、この地方出身の学生活動家の多くもまた新人民軍に参加し、あるいは都市の地下活動に身を投じていった。

一九七一年に最初の新人民軍の一部隊がコルディレラに入ってから以降、一度はマルコス政権下の戒厳令のもとで多大なダメージを受け後退しつつも、フィリピン有数の強力な人民の軍隊として、新人民軍はこの地方の人民の護民官としてたたかってきた。

一九七五年にチコという川に大きなダムを作る政府プロジェクトが始まった。軍隊を引き連れた電力会社が入り込み、住民たちに虐待を開始した。この計画は人々の暮らす村々をダムの



底に沈めるものであったために、新人民軍を先頭に激しい反対闘争が起こり、ついに計画は延期に追い込まれた。今回の一連の軍事作戦も、同時にきわめて露骨な大企業の意志を受けた金もつけのための動機を持ったものである。すなわち一連の軍事攻勢は抵抗運動を一掃したあとにダムを建設するためのものであるという報道がなされており、さらに住民の意志に関わりなく勝手に山々を丸裸にしていく木材企業がこの地に入り込むことを助ける水先案内人の役目をもそれは果たしていくといわれている。これらの企業は、この地方の農民たちの組織的な抵抗闘争のために、かつてこの地からたたき出された連中なのだ。

大衆運動が支える 解放区とCPDF

一九八一年に発足し、今日この地方の実質的な革命政府ともいえる存在となった革命運動の統一戦線CPDF（コルディレラ人民民主戦線）は、その綱領の冒頭に誇らしげにこう記している。

「われわれコルディレラ人民は、第一に真先にフィリピン人民である。人民としてのわれわれの運命は、不可避にフィリピン国家の運命と結合している。われわれは労働者・農民、小ブル、婦人・青年、そしてその他の搾取抑圧されている圧倒的多数たるフィリピン人民の一部である。——われわれの中心的目的は、民族解放と真の民主主義をかちとるべくコルディレラ人民を統一し、われわれコルディレラ人民と他のフィリピン人民とを団結させることである」

このような勢力に率いられて、コルディレラ地方はフィリピン全体の中でも極めて発達した人民闘争の重層的構造を築き上げてきた。それは今日すでに「解放区」と呼ぶべき堅固に組織された農村地域をいくつも内包したフィリピン革命最大の拠点である。そこでは新人民軍の兵士たちは、十数種類もある異なった言語や習慣に精通し、貧農たちとともに働きながら粘り強く貧農たちを組織してきた。そして、部族集団の間のもめごとや反目をより広いフィリピン人民全体の利益のための闘争という観点に立って解決しながら、村々を革命的に再組織化しつづけてきた。新人民軍は、この地域での多国籍企業の横暴や国軍の展開や地主の搾取から農民とその運動を防御するための武装闘争を担う。そして同時にコルディレラ人民はなぜ土地を奪われたのか、フィリピン農民はなぜいまでも貧しいままであるのか、敵は誰なのか、誰と団結すべきなのかを教える政治的前衛として、自己犠牲を惜しまず活動している。そしてこのような活動の中からVCLと呼ばれる村の革命的な指導者会議が生み出され、村々の革命政府とも

いえる実体を形成してきたのだ。

「俺たちの村でも、VCLができる前と後では、村は大きく変わったよ。昔は反動政府しかなかったから、言われるがままにいろいろ悪い命令や一方的な要求が村に押しつけられていたんだ。今も反動政府はあることはあるけれど、VCLができて自分たちで村を作っているようになったんだからね」(解放区内農村に住む農民のインタビューより)

そして人民の護民官・政治的前衛としてのこのような活動によって、新人民軍は農民たちに厚く信頼されている。農民たちから食糧が提供され、彼ら自身の娘や息子が日々その隊列に身を投じる新人民軍は文字通りの「人民の軍隊」として成長しつづけてきた。コルディレラ地方の貧農出身の一新人民軍兵士は、日本人民に向けて次のようなメッセージを寄せている。

「仲間の労働者のために懸命にたたかっている人たちが学生の皆さん!このフィリピンでは日本帝国主義とアメリカ帝国主義が経済的にも軍事的にもアキノ政権を支援していることを、どうか日本の皆さん、知ってください。私たちがこの帝国主義という敵とたたかえるように支援をお願いします。精神的・物質的支援だけでなく、技術的な援助もお願いします。帝国主義の軍隊というのは完全な装備を持っているからです。私たちは強固な意志をもっていますが、武器が不十分です。あなたがたの支援があれば勝利は困難です。私たちは、フィリピンのたかいたの前進は、同じような状態におかれたアジアの国々のたたかう人民の勝利の一步だと確信しています」

革命運動の孤立化 ねらう国軍の爆撃

この地方への一貫した政府の弾圧の歴史は、このような全人民的なたたかいから解放区を分断・孤立させ破壊していくことが、マルコス時代から引きつづくフィリピン支配階級に課せられた第一級の命題であったことを物語っている。少なくとも一九八二年には、今回の作戦地域になった村々を「反乱者の基地」とみなすとの宣言が行われ、以降さまざまな大規模な軍事作

コルディレラではこのような農村の組織化をとりまいて、労働者・女性・学生などの合法的大衆運動がぶあつく存在している。

よく知られているところでは、コルディレラ最大の合法大衆運動の連合体であるコルディレラ人民同盟(CPA)がある。この組織はコルディレラ地方の被抑圧人民の闘争を横につなぐとともに、それら総体をアキノ政府に対する闘争へと発展・結合していく役目を果たしている。あのバギオ大地震の時に先進国が送り込んだ救援団がたった二日ではほとんどの貧しい犠牲者たちを瓦礫の下に残して引き上げたあとも危険を省みず生存者の救援にあたったのは鉱山で働くコルディレラの労働者や、献身的な人民組織であった。

戦の舞台になってきた。一九八五年にはマラッグ谷に住んでいる人々に対して一方的に避難命令が出され、その後この地は「無人の土地」であると宣伝された。谷への出入りは禁止され、離村を拒否した人々は社会の転覆を狙うものだとレッテルを張られ、逮捕や虐殺の危機に常に直面してきた。その後、一九八六年のペガサス作戦、一九八七年のレッド・バスター作戦、一九八九年のバキララ作戦を経て、昨年から新人民軍鎮圧に功績のある四人の将軍が直接指揮するより大きな規模の一連の作戦へと引きつがれ、今日にいたっているのである。

解放区再建闘争に連帯しな

この問題をつうじたわれわれ日本人の任務の第一は、フィリピンを始めた第三世界革命への国境を越えた無私の連帯戦をますます強化することである。

北部ルソン爆撃にあつては、たたき出された

農民たちは国軍の村破壊が完全に終わった後、飢えと病気で衰弱しきった時点で村に帰される。村では、日々丹精してきた水田の米は全滅し、保存してあった穀物は略奪され、家は無残な焼け跡となっている。農民たちはその日から飢え



(「JUSTICE AND PEACE REVIEW 91年6月」より)

と病気に苦しみながら、その村で生き抜いていくための言葉を絶する努力を強いられる。

しかし、帝国主義者とフィリピン支配階級が思い込んでいるように、それで彼らフィリピン革命の希望が断ち切れ、革命の主体たちがいなくなり、生きるためにたたかいてきた村々の革命的な自治組織が壊滅するだろうか?革命的フィリピン人民が互いに疑心暗鬼になり、革命的団結を忘れ去ってしまうだろうか?

断じて否である。北部ルソンの住民たちは「村を明け渡せ」という国軍の避難勧告に従うことは彼らが生きるために宮々として築いてきた生活の基盤をガタガタに破壊するのみならず、中央政府の抑圧とたたかってきた抵抗闘争の誇り高い蓄積を敵の前に捨て去ることになることをすでに知っている。現地から送られてきた記録によれば、農民たちはこの爆撃の途中から避難勧告を堂々と拒否し、さらにこの爆撃の即時中止を求めて地方議会に訴えるなど、組織的な抵抗を開始している。

これらの事件は、帝国主義と結びついた自国支配層のもとでは、フィリピンの貧農や都市貧民たちにとっていかなる未来もありえないこと、たとえ自分は殺されようとも次代・次々代のためにフィリピン革命を勝利させる以外に、この国の抑圧された人々の解放の道がないことをこのうえなく雄弁に教える。現地からの報告によれば、村に帰った農民たちは決して絶望することなく家を建て直し、ふたたび米を植え始めたという。われわれはこのような人間的努力に心から連帯し、日本という帝国主義の足元から全力でこれに連帯する人々を組織する決意を固めたい。

フィリピンにおけるこれらの状況に、国連やブルジョアマスコミはいまだ冷やかな沈黙を決め込んでいる。

それは、貧困のかぎりなく蓄積される第三世界人民には「人権」などない、とりわけ生きるため食うために武装して帝国主義に抵抗するも

のたち共産主義者には死をもって報いてもかまわないという、帝国主義が本国人民にしかけてくる隠然たるイデオロギー攻勢の一環なのだ。国際主義プロレタリアートたろうとする者は、断固として、ありとあらゆる機会にこれに正面から反論する義務がある。

フィリピン人民の革命闘争とその団結は、帝国主義者とフィリピン支配階級が信じ込もうとしているような「一部共産ゲリラによって煽動された結果」などではない。新植民地支配そのもの、帝国主義そのもの、そして世界のほんの一握りの人々に富が集中し、他方の大多数の人民が飢え死にスレスレの状況にあるというこの資本主義のもとでの現実そのものが、フィリピン人民の中に共産主義への革命への希望を育てているのだ。この問題を通じて、われわれの眼にはつきりと見えてくる問題がある。それは、帝国主義のこのような残酷無残な抑圧のもとにある第三世界において、フィリピンがそうであるように共産主義が人民の生きる希望として再生していくならば、帝国主義国に生きるわれわれが第三世界人民の革命的たたかいへの連帯を通して共産主義を自己の希望とすることが絶対にできるはずだということである。そして日本において、あらゆる運動のなかで、われわれが語るべきなのはまさにこのような希望なのである。

第二の任務は、われわれが一貫して主張してきたように、アジアにおける米軍基地との闘争、日米軍事同盟との闘争を掲げる国際主義政治闘争とその他の国際的統一戦線を、第三世界革命陣地策動と正面から対峙するものとして、かならず建設しなければならないということである。

る。解放区破壊のための複合的な作戦は、そのような国際主義プロレタリアートの国境を越えた政治決起によってこそ食い止めることができる。敵が描くシナリオは次のようなものである。北部ルソンのような無差別爆撃による拠点からのたたき出しを第一段階として、第二段階では敵は、荒廃した村に戻った住民の生活苦につけこみ、買収や脅しによって住民をスパイとして育成し、ビジランテやカフグと呼ばれるさまざまな反共自警団を組織し、人民の内部に不信と対立・分断を持ち込んでいく。そして第三段階では、ODAなどの帝国主義的援助をその財源とした支配階級がリードするまやかしの「地域開発計画」が持ち込まれる。これによって、フィリピン人民を利益誘導し、階級闘争から離反させ、支配階級のもとにすりよって生きていく道に屈伏させていこうとするのである。

われわれはフィリピン革命の拠点破壊を、このような敵のシナリオのとおりに進ませてはならない。前進するフィリピン人民のたたかいを半ばで息絶えさせないために、革命への攻撃に対する反撃の先頭に、国際主義プロレタリアートこそが立たなければならない。なぜなら、北部ルソン爆撃問題を通じて明らかになっているように、フィリピン「国内難民」問題は、「ゲリラがいるから一般住民の生活が脅かされる」といった帝本国的な物の見方を拒絶した、まさに革命と反革命の激しい闘争そのものなのだから。

「政府軍は人民大衆を脅しによって全面戦争に屈伏させることはできない。彼らの犯罪的な戦争は、ますますファシスト軍隊と人民の軍隊の本質的な違いを人民の前に明らかにするだけ

だ。結局のところ、人民がどちらを支持するかが戦争の結果づける転換点である」という、コルディラ人民民主戦線(CPDF)が世界の人民にあてた北部ルソン爆撃に関する抗議声明の宣言に真に連帯するためには、ベトナム戦争に際しての全世界の先進的労働者・学生のためにかいにもまして意識的な、帝国主義とその軍事同盟に対する国際主義プロレタリアートの政治的決起が不可欠である。

★ ★ ★

全国のプロレタリアの兄弟姉妹たち！

北部ルソン爆撃に代表される第三世界の革命運動陣地の真の犯罪性と、第三世界人民の反帝国主義・民族解放・社会主義のたたかいの正義性は、他の誰でもない国際主義プロレタリアートによってこそ、多くの仲間たちに訴えていくことができる。

CPA(コルディラ人民同盟)やBAYAN(新民族主義者同盟)を始め、フィリピンのたたかう人民組織、心ある大衆団体の多くが、この北部ルソン爆撃問題を全国的・全人民的課題としてとらえ、反撃を開始しようとしている。アキノ政権と日米帝国主義は、彼らに対しても「反乱者」としての烙印を押し、わが帝国主義足下人民との分断を計るだろう。日本帝国主義足下の先進的プロレタリアートは、フィリピン人民の呼びかけに応え、帝国主義のアジア・第三世界支配との闘争をめざすすべての政治運動体、たたかう労働組合、国際連帯運動体、学生組織は、それぞれの運動を通じた反撃を開始しよう！ともにたたかおう！

資料

(フィリピン・新民族主義者同盟)

バヤンのアピール

フィリピンの広範な統一戦線体であるBAYANが「日本人民の運動」90」に寄せたアピールを資料として掲載します(見出しは編集局責任)。

全面戦争政策と人権侵害に反対の宣言

91年5月15日

コラソン・アキノは政権の座についた一年後に、民族民主運動に対する全面戦争政策を宣言しました。この政策はCIAの反乱鎮圧(抑止)戦略ILIC(低強度紛争)戦略に

よって援護されたものです。この全面戦争政策は大規模なテロ、混乱、人命と財産の破壊、生活手段の剥奪などをもたらしています。フィリピン人民の運動も、この抑圧的な政策

によって苦しめられています。

農村部における虐殺も、残虐かつ頻繁なものとなっています。今年の四月には、中部ルソンのパンガシナン州で六人が虐殺されました。ある事例においては、少年が軍によって焼き殺されています。

反乱者(新人民軍のこと)訳注)

に対する激しい農村部での戦争と、大部隊を地域に展開させ、豊かな資源を開発するために行われる軍事作戦においては、爆撃、機銃掃射、襲撃、戦略村作戦、財産没収、略奪、

人民の運動に対する攻撃は激化しています。先日(五月六日)には、西

家屋への放火、食料封鎖といったことが一般的になっています。このようにこの軍事作戦は、大規模な住民の強制立ち退き―生活の場と生活手段の剥奪をもたらし、「国内難民」と呼ばれている現象を引き起こしています。軍の住民管理作戦として行われる食料封鎖や戦略村作戦は、子供たち、女たち、男たちに飢餓と病

気、そして死をもたらしています。こうした反乱鎮圧(抑止)作戦においては、もともと苦しめられるのは一般住民なのです。北部ルソンのマラッグ溪谷で起こっているのは、このような事態です。しかし、これはマラッグ溪谷だけで起こっていることではなく、フィリピン全土に多くのマラッグ溪谷が存在しているので

す。

学習資料

目次

- (1) フィリピン階級闘争史
- (2) 日米帝の新植民地支配
- (3) 人民の現状とたたかい
- (4) 国際主義政治闘争を組織せよ

フィリピン革命への連帯に向けて

■発行日 一九九一年三月
■定価 五〇〇円
■B5版 一〇二ページ

— 発売中 —
(お申し込みは大阪戦旗社に)

(2) 貧農と漁民が農地・漁場を所有する権利を奪われます。これはフィリピン人民の基本的要求である真の農地改革を否定するものです。

(3) この計画は、アキノ政権が真の農地改革のような貧農・漁民の幸福と利益を犠牲にして、大地主・買収資本家、日本のような外国の利益を優先させようとしていることを示す

わが国の経済に対する外国の搾取と支配と、それに反対する真の農地改革・民族的工業化の間の対立なのです。

(5) この計画は、輸出指向・輸入依存・外資・援助依存というアキノ政権のかたよった新植民地主義的な工業化政策を永久化するものです。

日本の大企業が、この計画を支配

私たちは、できるだけ早く、このカラバルソン計画反対運動について、私たちの目的からする運動基調を送ります。私たちは、皆さんがこの反対運動について考え、これを支援して下さると信じていますし、また、この運動は現実の恐れとなっている経済的・政治的・軍事的日本の再侵略に反対するフィリピン人民と日本人の連帯を、さらに発展させていくものとなると考えます。私たちは、人民と国々との関係が主権と独立の相互尊重と平等によって特徴

国軍の爆撃によって住む家をなくした北部ルソンの子どもたち

づけられるような新たな世界を求めるとともに活動していかなくてはなりません。このような活動を通じて初めて、私たちは世界の平和と、世界の諸国と諸国民の間の協力とを実現することができると信じます。

このカラバルソン計画は、フィリピン人民の生活に対して深刻な関わり合いをもつものです。

(1) 何千人もの農民・漁民が立ち退きによって生活の場と生活手段を失います。

(2) 貧農と漁民が農地・漁場を所有する権利を奪われます。これはフィリピン人民の基本的要求である真の農地改革を否定するものです。

(3) この計画は、アキノ政権が真の農地改革のような貧農・漁民の幸福と利益を犠牲にして、大地主・買収資本家、日本のような外国の利益を優先させようとしていることを示す

このカラバルソン計画は、フィリピン人民の生活に対して深刻な関わり合いをもつものです。

(1) 何千人もの農民・漁民が立ち退きによって生活の場と生活手段を失います。

(2) 貧農と漁民が農地・漁場を所有する権利を奪われます。これはフィリピン人民の基本的要求である真の農地改革を否定するものです。

(3) この計画は、アキノ政権が真の農地改革のような貧農・漁民の幸福と利益を犠牲にして、大地主・買収資本家、日本のような外国の利益を優先させようとしていることを示す

主権と生活にみる
カラバルソン計画

91年5月15日

ネグロス州・パコロド市のマグスンガイ村、ブロック・シガイにおいて一歳四カ月の子供を含む六人が殺されています。そのうちの四人はバヤンの西ネグロス州支部のメンバーでした。これは一九八六年以来、バヤンにかけられてきた弾圧のごく一部にすぎません。最近の弾圧のやり方は、大衆運動のリーダーやメンバー

バヤン(新民族主義者同盟)は日本人の運動・90、およびすべての日本の皆さんに対して、カラバルソン計画に反対して下さるよう訴えます。

カラバルソン計画とは、優良な農地をいわずに工業団地に転用してしまおうとするアキノ政権の計画です。この計画は、カビテ州・ラグナ州・バタンガス州・リサール州・ケソン州に及ぶもので、低迷する経済を支えるために、外国資本ととりわけ日本資本を誘致しようとするアキノ政権の試みなのです。日本の政府開発援助(ODA)のもとで実施される海外援助も、この計画の資金として利用されます。インフラストラクチャー(産業社会資本)整備のために、多額の資金が外国から、とりわけ日本の海外経済協力基金(OECF)から借入られます。

このカラバルソン計画は、フィリピン人民の生活に対して深刻な関わり合いをもつものです。

(1) 何千人もの農民・漁民が立ち退きによって生活の場と生活手段を失います。

(2) 貧農と漁民が農地・漁場を所有する権利を奪われます。これはフィリピン人民の基本的要求である真の農地改革を否定するものです。

(3) この計画は、アキノ政権が真の農地改革のような貧農・漁民の幸福と利益を犠牲にして、大地主・買収資本家、日本のような外国の利益を優先させようとしていることを示す

を犯罪に関連させて不当・でっち上げ逮捕して信用を失墜させるというものです。法に基づかない任意の逮捕や拘束、張り込み、事務所捜索、運動のリーダーやメンバーの「失踪」と誘拐殺害(サルベージ)、デマ宣伝などはいまでもありません。

米国とその同盟国の支援によって、人権侵害は、より巧妙な、組織的な、

徹底的なものとなっています。北部ルソンでの爆撃においては、米軍基地が直接使用されたという証拠が発見されています。外国からの援助もまた、軍事援助の形態をとって、人権侵害の道具となっています。経済援助、開発計画、「人道的」援助などは、LIC(低強度紛争)戦略の重要な部分をしています。経済援助

助は、経済問題を解決するためにではなく、左翼を拡大する要因であると考えられている経済危機の影響を緩和するために供与されており、「人道的」援助もまた、軍に対する支援や、軍の「心理作戦」のために利用されているのです。

こうした見地から、私たちは、人権を守るという普遍的な原則に基づいてというだけではなく、日本政府がフィリピン政府に対して政治的・経済的支援を与えることにより、人権侵害を促進、合法化し、また、弾圧と全面戦争政策を制度化している、という点からも日本人の皆さんに対して連帯を訴えたいと思います。

私たちは、日本人の運動・凸および、すべての日本人の皆さんに連帯を訴えるとともに、日本人とフィリピン人民の双方にとって重要なこの問題について、皆さんが考えてくださると信じます。



革命から12年目を迎えるニカラグア

政権奪還にむけ闘うFSLNに 階級的な連帯運動を組織せよ!

七九年七月一九日のソモサ独裁を打倒したニカラグア革命は、その前衛であるサンディニスタ民族解放戦線(FSLN)が九〇年二月のニカラグア総選挙において、親米派「国民連合」(UNO)に破れるという事態を迎えた。以降、約一年半が過ぎようとしている。ブルジョア・マスコミは「ニカラグア革命は終焉した」とか、あるいは「中南米では、民主化が進み、後は経済危機の問題だけだ」といった風潮を広めている。

だがニカラグア革命は、赤々とした炎を放って継続している。米帝ならびに国際帝国主義と中南米支配階級の巨大なニカラグア反革命介入にもかかわらず、FSLNはニカラグア・中米の最大の政治勢力として、一〇年間まもり続けた革命的な社会変革の地平を防衛するたたかいをくり広げている。何よりも賞賛されるべきは、コントラと米帝の反革命軍事介入を阻止し、FSLNとサンディニスタ人民軍、そして各種の労働者・農民などの大衆的団結組織を守ったことである。

しかし一方で、一〇年間、営々と築かれてきた革命的な社会改革の成果が、親米チャモロ政権のもとで切り崩され始め、国際帝国主義の新たな侵略が開始されるとともに、ニカラグアのブルジョア・地主の復権がはかられようとしている。これに対しFSLNは、選挙敗北を痛苦に総括し、ニカラグア革命の成果を防衛し、人民の前衛に立った新たなたたかいを始めている。

われわれは、ニカラグア革命の一旦の後退と継続するたたかいに大きな関心を抱かざるをえない。そして何よりも国際階級闘争の最前線にプロレタリア国際主義の原則的なたたかいを復権していくことの重要性を痛感する。なぜなら、ニカラグアでのFSLNの苦闘こそは、東欧・ソ連の誤った社会主義・スターリン主義の崩壊によって、いっそう帝国主義の攻勢と第三世界革命の孤立化・後退が進むなかで、国際的な共産主義運動と階級闘争の史上最大の試練と困難性の典型にはかならないからである。

国際帝国主義の反革命的包囲・介入の攻撃によって孤立化を強いられるニカラグアやエルサルバドル、そしてアジアのフィリピンなど第三世界での反帝民族解放・社会主義革命のたたかいに、今こそ世界の先進的なプロレタリアート人民は断固たる国際主義的連帯闘争に立ち上らなければならない。

★

チャモロ政権下のニカラグア

昨年四月に成立した親米チャモロ政権のもとで、ニカラグアではどのようなことが起こったか。

その前にFSLN政権下での状況をふり返っておきたい。

★

以下、われわれは、中米・ニカラグアの現状とそのたたかいを報告し、国際共産主義運動の歴史的課題を提起する。また、米帝ならびに国際帝国主義のラテン・アメリカ支配の再編を暴き、ニカラグア革命やエルサルバドルなどラテン・アメリカの革命運動への国際主義的連帯に立ち上ることを訴える。



ニカラグア革命10周年記念集会(89年7月19日・マナグア)

FSLNの革命政権下では、土地改革や教育制度の改革などによって、労働者・農民のさまざまな権利が保障され、かつてのソモサ独裁政権の腐敗と反人民性が克服され、また米帝に支配された新植民地主義的搾取制度の打破がはかられていた。しかし一方で、米帝による経済封鎖や反革命コントラへの支援が行われ、革命

政権はコントラとの内戦による国土の荒廃、そして経済危機を強いられ続けた。国家予算の五〇%が軍事費に当てられ、ニカラグア人口三五〇万のうち約六万人が内戦の犠牲者となり、物資の欠乏によるインフレは八九年で一六〇〇%にもなった。内戦によってニカラグアは、GNP四分の一約一五〇億ドルもの物的損失をこうむった。ニカラグア革命に対する米帝国主義の破壊策動は、以上のようなニカラグアの破滅的事態を強要するものであった。

人民に犠牲強い るチャモロ政権

こうしたニカラグアの危機は、チャモロ政権によって解決されたのだろうか。結論から言えば、内戦は事実上終了しているが、これを除き事態はまったく好転していない。そればかりか、革命政権のもとで実現された革命の成果が解体されようとしている。

「戦争の終結」「経済の回復」の二大公約をかかげたチャモロ政権は、発足早々、「百日間でインフレを解消し、経済活動の整備、安定化をはかる」との経済復興計画をぶちあげた。いわゆる百日間再建計画である。新中央銀行総裁に就任したフランシスコ・マヨルガは、インフレ退治と称した一連の耐乏政策を打ち出した。まず政府の歳出を大幅に削減して通貨量を縮小し、①農業を中心とした経済活動の復興②新通貨「コルドバ・オロ」の発行、国際援助の導入、コルドバの対ドル切り下げ③民営化の推進、などを進めたのである。

これらは、IMF・世界銀行などの国際金融機関が第三世界諸国の経済危機に対して進める緊縮政策と同一のものである。それは、海外に逃亡したニカラグア・ブルジョアジーや地主と、国際帝国主義によってニカラグア経済を「再建」していくこうとするものである。

百日間再建計画は、いっそうの経済危機を進行させた。IMF・世界銀行の意を受けた緊縮政策は、企業倒産と企業再編を増大させ、人員削減と称した公共・民間労働者約三万を失業の危機にたたきこみ、保健・教育制度の大幅な質的低下を生み出した。またFSLN政権下で一四〇%に低下した九〇年のインフレ率は、チャモロ政権下で三二〇%となり、基本食料さえ一八六%も値上がりした。食料援助や医療援助が削減され、無料であった学生の交通費が有料化された。このようななかで景気は大幅に後退し、工業生産がマイナス八・四%の低下、建設はマイナス三六%、国内市場向け農業生産はトウモロコシがそれまでの四〇%、米が七四%、大豆が一二%という状態となったのである。「サンディニスタ政府の時には食料援助が米と豆だったが、今は米だけになった」とか、ある食堂の店主の「売り物はスूपだけ。こんなことは初めてだ」といったニカラグア人民の声は、

チャモロ政権になってよりひどい経済危機が進行したことを物語っている。チャモロ政権の百日間再建計画は皮肉なことに百日間で破綻し、九〇年秋、マヨルガ中央銀行総裁は辞任する始末となった。

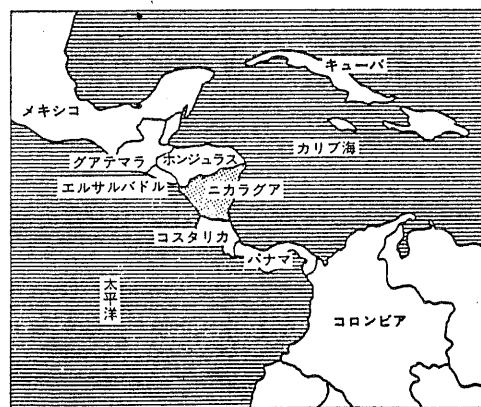
ニカラグア人民に犠牲を強いるチャモロ政権の経済耐乏政策は、FSLN革命政権の社会改革の成果と革命の基盤を根本から解体しようとする反革命政策と固く結びついていた。それは第一に、社会主義的経済部門を解体し、ブルジョアジー・地主の台頭を促進する資本主義的経済制度を確立しようとするものであった。具体的には、いわゆる国有化部門である「人民財産領域（APP）」が私有・民営化され、国家独占のもとにあった外国貿易が生産者組合や個人に許可され、私的金融制度が認可されるなど、生産手段の私有化と「自由市場経済」化が大幅に進められた。FSLNが貧農への土地給付を進めたことに対して、チャモロ政権はその権利を認めつつも旧地主の権利回復も認めることによって、各地で旧地主の復活が始まった。また関税緩和と私的貿易の許可にともない、隣国の商品が大量に流入し、競争力のない国内産業の破壊がいつそう進行するとともに、同時に商業ブルジョアジーの台頭が進んだ。

第二には、軍事予算のたび重なる削減、公営・民間企業の合理化などによって、FSLNの影響

革命の成果を防 衛するFSLN

こうした親米チャモロ政権の反動的な政策に対して、ニカラグア人民の巨大な抵抗闘争が開始されている。九〇年七月には全国労働者戦線（FNT）の呼びかけで合理化政策反対、賃上げを要求したゼネストが組織され、約一〇万の労働者が参加し、かつてのソモサ独裁末期をほうふつさせるたたかいがまき起こった。また、交通費援助の撤廃に反対する学生のとたたかいや、農業労働者のたたかきもくり広げられた。とりわけ、七月ゼネストのたたかきには、最大の緊張へと発展した。この時、合理化政策反対、賃上げを要求する労働者と政府支持者が鋭く対立し、主要道路にバリケードが築かれ、工場にたてこもる労働者とスト破り勢力が交戦し、百人を超える死傷者を出す事態へといたったのである。チャモロ政権の極右反動派である副大統領ゴディ派と企業連盟は、「サンディニスタの反乱」なる反革命宣伝をし、「救国戦線」を結成して独自の武装集団を組織し、またアメリカの「干渉」をも呼びかけた。そしてホンジュラス駐留の米第八二空挺師団は、これに対応した出動準備に入った。FSLNのオルテガ前大統領は、これを「革命以来最大の危険だった」と語っている。

七月ゼネストは、「国民和解」を重視し対話



響下にある政府軍（ウンベルト・オルテガ前国防相が最高司令官に任命された事実上のサンディニスタ人民軍）兵士や、労働者への大量解雇が行われ、ニカラグア革命を支えた階級的な大衆諸組織を弱める攻撃が開始された。とくに首都マナグア市長によるFSLN労組活動家を狙った解雇は、その象徴的な攻撃であった。

第三には、労働者・貧農など人民のための社会保障制度をどんどん切り崩すものであった。食料援助や医療・教育に対する国家援助が大幅に削減されたり、FSLN政権がコーヒーへの転作を進めた成果を、コーヒー価格の暴落のために「農業効率化」を押しつけて綿作を強制するなど、徹底的なブルジョア的経済効率化のもとに人民の利益を破壊しつつあった。

の立場をとったチャモロ大統領と新中央銀行総裁ラカヨらが極右勢力と分裂し、政府と労働者側の「話し合い解決」へといたる。そしてたしかう労働者側は、合理化の一方的措置を改めさせ、経済状態から合理化がやむをえない場合には十分な保障措置をとるという回答をかちとった。あわせて雇用促進や、四〇%の賃上げをも合意した。また学生は交通費援助の撤廃を「見直す」ことで合意した。

選挙で破れたとはいえ、四一%もの支持票を集め、いままおニカラグア最大の革命的政治勢力であるFSLNは、もちろんこうした抵抗闘争の前衛に立ってたたかっている。と同時に、再びの内戦を回避するために、そして米帝の反革命直接介入を阻止するために、政・労の対話解決を推進したのである。

ニカラグア人民とFSLNの革命の成果を防衛するたたかいは、いままお強力である。その力は、政権内部に分裂を生じさせ、チャモロ政権に性急な反革命政策をとらせず「穏健な」政策を強いている。つまりFSLNは、内戦の終結と経済回復を要求するニカラグア人民に比べ、何よりもニカラグア革命運動の軍事的破壊を狙う米帝の直接介入を阻止するべく、チャモロ・ラカヨ派に対して戦略的に「妥協」し、同時に労働者・貧農の権利防衛を担うといった極めて複雑なたたかいを進めている。

このように親米チャモロ政権が登場したニカ

ラグアでは、いまなおFSLNとニカラグアの先進的な労働者・農民の革命運動が強力に生き残っている。そして国際帝国主義とニカラグアのブルジョアジー・地主による革命破壊策動に対し、FSLNと人民の防衛戦が日夜くり広げられている。ニカラグア革命は決して敗北していない。なぜならば、FSLNとニカラグア革命を軍事的に破壊する目的であった米帝とコントラの仕掛けた戦争は、国際・国内世論の圧力

あらたな闘いにFSLN

FSLNとニカラグア革命運動は、東欧やソ連のように革命の成果をその内部から崩壊させることなく生き残り、いまなお継続している。だが革命政権が親米チャモロ政権にとって代わったという、まったく新しい条件のもとで、FSLNはいかなる展望をもったたかいたを進めようとしているのだろうか。伝え聞く情報では、「使命を終えた」現綱領に代わる新綱領とその戦術・組織を確立するべく、FSLNの第一回大会が今年の七月に開催される。こうした努力は、まったく新しい条件のもとで新しい実践路線を確立し、ニカラグア革命の前衛たるFSLNに革命的生命力を補給し、一九九六年の選挙戦によって再び革命政権を獲得する力となるも

によってコントラを解体させながら事実上、終了したのである。FSLNとニカラグア人民は、政権を手放すという代価を払いながら、反革命戦争に勝利し、ニカラグア革命運動を守りきった。そして彼らは、国際帝国主義とニカラグア資本家・地主の利害を代表するチャモロ政権との、より激しい階級闘争を担いつづけているのだ。

のである。こうしたニカラグアの革命的前衛党建設の努力に、われわれは大きな敬意を払い、またその発展に断固たる支持と連帯を表明するものである。

昨年の六月一七日、FSLNの全国会議が開かれ、革命一〇年の実践および選挙の総括と、当面する第一回大会までの中間的実践指針が決議された。そこには、ニカラグアでの新しい条件のもとでの、新たなたかいたの試みが見てとれる。

その決議の内容に関して、以下に注目すべき内容を報告し、現在の国際的な共産主義運動と階級闘争の突破すべき歴史的な課題を明らかにしたい。

選挙総括通じ主 体の弱点を切開

第一に報告すべきは、ニカラグア革命の直面した困難性についてである。FSLNは、次のように語っている。八〇年代に米帝は「世界的規模で人民的・革命的大義との地球的対抗を開始し、覇権の後退の回復をめざし、…第一の課題としてサンディニスタ人民革命の破壊を決意した」。また「中米諸国政府は、伝統的な搾取と支配の構造に固執して、新しいニカラグアの革命的模範とこの地域の正義の事業との連帯に反対し、対決的立場をとり、アメリカの侵略の道具となった」。

一方国内状況に関して、「わが政府の着手した必要かつ正しい社会変革は、かならずしもニカラグア社会の特徴を考慮に入れてなかった」として、「国内反体制ブロックの結果が拡大した」と述べる。具体的には、ソモサ派、反サンディニスタ企業家、地主と富農、CIAに操作されたカリブ海岸のインディオ住民共同体、カトリック教会の有力層、伝統的な右翼政党と組合、そして農村や都市の遅れた層が、革命政府に反対し結集した。

またFSLNのとった社会主義的変革に関しては、次のように総括している。「確かに徹底的な変革を掲げることは正しかったとしても、

社会主義諸国のやり方が再生産されて、社会の政治指導のための唯一の党というスタイルと、公共業務の統制・集中の過剰な強調にいたった。こうした政策の実施は、しばしば強制的、官僚主義的なやり方で行われた。われわれが旗印として掲げ、実施を開始した社会主義的な方向でのモデルは、実際には、国家の再建と団結という計画と矛盾した」。

このようななかで、米帝国主義の侵略政策が革命的プロジェクトを浸食し、消耗させ、他方で社会主義諸国の深刻な危機が、戦争に対するFSLNの対処の可能性を低下させたとも語る。しかし、全体として「革命政府は、わが国の歴史上最も広範で、徹底した社会的・政治的・経済的成果をあげた。こうした革命的な変革は、わが国人民の英雄主義なくしては、FSLNの基礎組織と指導部の団結なくしては不可能であった」としている。

第二には、選挙敗北に示されたFSLN自身の組織的総括である。人民の大半がニカラグア革命に共鳴していたにもかかわらず、「愛国的兵役」の問題と「アメリカの友好政権になれば、経済状況を改善できるだろうとの期待」がチャモロとUNOの勝利につながったとFSLNはいう。米帝とコントラの侵略戦争により、ニカラグア青年の一〇人に一人が戦争によって殺され、幾千人もの若者が国を捨てて兵役義務の遂

行を回避する状況が生まれた。

だが、「愛国的兵役は、軍事的勝利を通じたサンディニスタ主義（民族解放）を一掃するという帝国主義の計画を失敗させた」として、FSLNはその意義を堅持する。むしろFSLNは、ニカラグア革命から若干の社会階層を遠ざける傾向のあった政策や、そうした状態の客観的根拠を分析し、FSLN自身にメスを入れ総括しようとしている。

たとえば、国有化政策の無差別的適用によって中小の規模の私的生産者を離反させたり、サンディニスタ人民軍と内務省の兵士や官吏、また政府役員とFSLN幹部による権力乱用や不正行為が農民を分裂させたりしたという。また「戦争と経済侵略は、党と政府にほぼ軍事的な、つまり上意下達の機構と規律を要求した。革命的國家を防衛するために、愛国的兵役の義務化、生産的課題への奉仕隊の動員、大衆的保健衛生運動の組織、識字運動、民兵隊と不正規戦闘旅団の組織、身分証明書による配給制度の導入などが、われわれ党員によって実施され、それがなければ革命が生き残ることも、前進することもありえなかった。とはいえ、こうした活動がFSLNの政治的消耗に導いたのも確かである」とも語っている。さらに次のような国際的問題にも言及している。「国際協力、とりわけ若手の社会主義諸国からの協力は、戦争のもっとも厳しい時期のわが国経済の機能を支える上で不可欠であった。しかし、この協力は、東欧の体制が相次いで変化したために激減した」。

FSLNはこうした自己の革命実践の意義と不十分性を対象化し、とくにFSLNのイメージと政治活動を弱めた欠陥と誤りを正すべく、権威主義や官僚主義の誤りを一掃し、「党内民主主義」による党員の団結と人民との信頼を回復しようとしている。

第三には、新たな情勢分析と、FSLNと革命運動の新たな活動目標についてである。FSLNはいう。総選挙でFSLNに投票した四一%のほとんどはニカラグア革命を意識的に支持し、他方UNOを支持した五五%はそれのほとんどが反サンディニスタ思想をもっているわけではなく、戦争の恐怖や経済改善の希望をもってFSLNに反対した。むしろ目的意識をもった反革命勢力は少数で、マイアミ・グループやソモサ残党たち、これと結びついた民間中央協議会(COSEP)の首脳などであり、UNO—三党派連合のうち五党派グループは反サンディニスタの立場をとっていない。これらが、革命の基本的変革を逆転させ、資産の回復、労働運動の破壊、農民の土地からの追い出し、企業と資産の強奪をはかっている。こうしたなかでFSLNは、現支持層を強固に打ち固め、またUNOを支持した流動的な人民たちを「サンディニスタの愛国的、人民的、民族的提案のまわりに結集させるために、…UNO支持者がサンディ

ニスタ支持者という区別を避け、つねに人民の団結のためにたたかい、さまざまな階層をそれぞれの中心的な利益のまわりに結集しなければならぬ」と主張している。

同時に、米帝への警戒心とたたかいは次のように述べている。「アメリカが申し出ている無償援助やクレジットがおおむね条件としているのは、革命的変革の解体であり、それをイデオロギーの分野で開始している。彼らは、親帝国主義的な労働組合組織の台頭を促進しており、労働運動の分裂と革命的労働組合の破壊をめざしている。そして中心的な革命組織、とくに軍隊とFSLNそのものを解体しようとしている」と。

FSLNは、新しいニカラグアの階級情勢を次のように分析し、今後の中心的な任務を政治的・思想的に自らを強化するたたかいだと結論づけている。「階級的な観点からすると、われわれが対抗しているのは、親米のブルジョア政府であり、その本能と綱領は革命の解体を求めている。しかし、現在までのところ行政政府の内部では、政治的な観点からFSLNとの性急な対決をさけようとしているグループが優勢になっている。FSLNは政権から降りたが、それはけっして革命の事業の終わりのや、サンディニスタの組織や体制の消滅を意味するものではない」「サンディニノ主義によってつくりだされた武装機関は、党派的な性格を持つべきものではなく、その愛国的で人民的な形成により、現時点では反人民的な弾圧の道具として利用されないための最良の保障となっている」「サンディニスタの労働組合組織や大衆団体は、全国で最大最強の組織である。国家の各権力、さまざまな政府機関や企業内におけるさまざまな機関や企業内におけるFSLNの合法的存在は、極右に対する均衡要素となっている」「FSLNの力は大きい、敵の力を過小評価せず、政治的・思想的にみずからを強化する活動を緊急に行わなければならない」。

こうした階級分析から、FSLNは次のような方針を打ち出している。第一に、FSLNの支持者を強固に団結させ、UNOに流れた人民を再組織し、ニカラグア全人民の団結にむけて分極化と報復主義を拒否するたたかいを組織すること。第二には、FSLNの統一と団結によって革命的成果の防衛をはかり、「未解決の内部問題が、わが党を弱める」ことを阻止すること。第三には、「主要な闘争形態は、組織された大衆の直接行動と政治的・思想的闘争となる」が、「報復主義的・反革命的勢力が策動している暴力的潮流の台頭に対して警戒心を維持し、法の枠内での非常事態対応計画を準備しなければならない」こと。そして九六年の選挙を通じて、再び政権につくことを目標として掲げている。

以上、見てきたように、FSLNは、新たなたたかいに踏み出そうとしている。その基軸的

なたたかいは、サンディニスタ人民軍を強固に組織し、労働組合や農民組合など大衆的な階級的団結体を組織し、国際帝国主義とニカラグアの反動的ブルジョアジーと地主に対する激しい階級闘争をひるまず進めることだ。かれらのたたかいは生命力和強さは、一貫してニカラグア人民の革命的英雄主義・献身性を最大限に発揮させつつけていることにある。

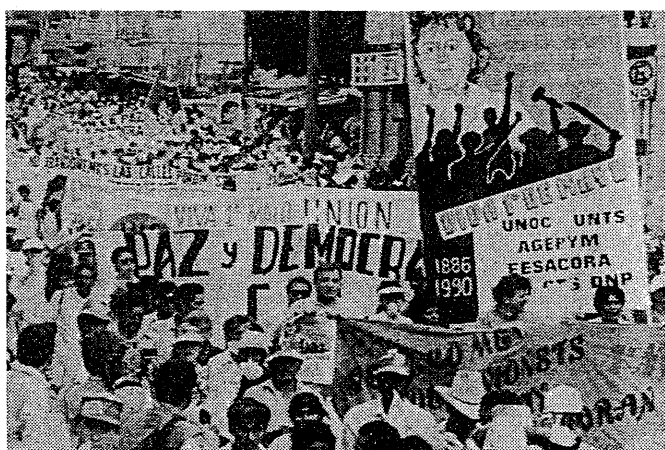
活発化する論争 の意味するもの

このような特筆すべきたたかいは担いつづけるFSLNにとって、親米ブルジョア政権のもとでは、かつての社会主義的変革を進めていくことが今日いっそう困難となっている。すなわちソ連・東欧の社会主義が崩壊した国際環境のなかでは、いっそう国際・国内ブルジョアジーへの「譲歩」を強いられ、FSLNは社会主義的変革を後退させざるをえない状況にある。現在のFSLNの主張の特徴は、これまでの革命的社会的改革の成果を防衛し、米帝のあらゆる侵略と長期にわたって対峙する民族的で全人民的な団結を押し出している点にある。国際・国内ブルジョアジーとの「譲歩」「妥協」を強いられる事態を背景にして、ニカラグア革命の進路をめぐるFSLNの内部ではさまざまな論争が活発化してきている。それは第一に、FSLNが「民族戦線をめざすのか、それともマルクス・レーニン主義の革命党をめざすのか」という論争であり、第二には、チャモロ政権の合理化政策などに対する「妥協」をめぐる、第三には「社会主義の道を選択するのかどうか」などをめぐってのものである。

これら、FSLNの党建設とニカラグア革命の性格に関する論争は、明らかに二つの重要な問題を世界の共産主義者と革命的プロレタリアートに問いかけるものである。つまり一つは、新植民地主義支配下で勝利した革命運動が、いかにして反帝民族解放闘争から社会主義革命への発展をもちとることができるのかという第三世界の革命運動に共通する問題である。ニカラグア革命は、七九年七月一九日にソモサ独裁政権を打倒した。以降の一〇年間、ニカラグア革命は、米帝による新植民地支配からの解放にむけて努力し、労働者・貧農たちで占められるニカラグア人民の大多数の利害のために、国際・国内ブルジョアジーや地主と対立して社会主義を指向していった。しかし、ニカラグア革命には残念ながら、国際的支援や連帯をするたたかいが極めて少なく、米帝の経済封鎖、コントラをあやつった反革命軍事介入によって包囲され、反帝民族解放闘争を社会主義革命へと発展しきれず、国内ブルジョアジーとの妥協を余儀なくされつづけたのである。

二つめには、ロシア革命の成立から問われ続けた現代過渡期世界の階級闘争における最大の

歴史的課題にはかならない。つまり、一国で勝利した革命をいかにして世界革命にまで発展させつづけていくのかという問題である。周知のように、国際共産主義運動におけるこの最大の歴史的な課題に関して、スターリン主義は「一国社会主義可能論」によって右翼的にその問題を封殺し、マルクス・レーニン主義をゆがめ、ロシア社会主義の防衛に他国の階級闘争を従属させて各国のプロレタリア階級闘争を見殺し抑圧してきた。一方レーニンは一国で革命を勝利させた革命的なプロレタリアート人民は、その後、革命を発展させ世界的な勝利を実現するまで、長期にわたる国際・国内ブルジョアジーとの巨大で強力な抵抗に直面することをはっきりと指し、「社会主義は思ったより歩みの鈍いものとなる」と語った。すなわちレーニン主義は、一国革命の勝利の後、国際・国内ブルジョアジーとの持久的な対峙戦略を必要とし、「ネット」のような生産力の回復と社会主義的改造への



エルサルバドルのメーデー(90年5月)

の条件を整えるための「資本主義への妥協」や、「プレスト・リトフスク」のような「帝国主義者との妥協」をあえて選択しながらも、あくまで国際的規模での社会主義革命の勝利に向けて、世界党建設を中心としたプロレタリア国際主義の実践を堅持し、階級闘争を粘りつづけたたたかいつづける路線である。

スターリン主義に支配された「社会主義建設」の誤った路線が歴史的な破産をとり、ニカラグアを始め、第三世界の反帝民族解放・社会主義革命は未曾有の孤立化を強いられ、国際帝国主義者の攻勢にさらされている。FSLNの内部で発生している論争は、つまるところ反帝民族解放闘争を社会主義革命と結びつけ、一国の革命を世界社会主義革命に結びつけつづけるながら、国際帝国主義との持久的対峙戦を進めるといって、現代過渡期世界の新たな戦略・戦術の創出を突きつけている。彼らが突き出す、国際的な革命支援と連帯、第三世界諸国の一国における革命の生き残り発展の持久的対峙戦略の創出、こ

これらの課題に世界のプロレタリアートは断固応えなければならぬ。
われわれは、こうしたニカラグア革命運動とFSLNの直面する歴史的なたたかいに断固連帯する。「一国社会主義路線」を基礎としたス

★ 革命運動への国際的な支援を ★

アメリカを先頭とした国際帝国主義は、ソ連・東欧などの資本主義化と、第三世界諸国の革命運動破壊を全力で推進している。こうしたなかで帝国主義諸国は、第三世界の新植民地主義支配をめぐる策謀と抗争をくり広げている。

巨額な累積債務に苦しむ中南米諸国人民に対し、新たな国際帝国主義の支配戦略が襲いかかってきた。

昨年六月に「二世紀にむけた生き残り」とぶちあげられた米帝・ブッシュの「米州自由貿易圏構想」がそれである。これは、経済力の後退にあえぐ米帝が他帝国主義に対抗し、南北アメリカ大陸全域の経済的支配を強めようとする構想である。米・カナダにメキシコの加わった「北米自由貿易圏」が九二年を目標に動き始めるなかで、中南米諸国にもこの動きに拍車がかかった。今年に入って、ブラジル、アルゼンチンなどの「南米自由貿易圏構想」、メキシコ、コロンビア、ベネズエラの「自由貿易構想」、中米諸国のメキシコ、ペルー、ボリビアなどの「アンデス自由貿易圏構想」などがぞくぞくと打ち出された。今年六月の米州機構(OAS)の年次総会では、「米州全域に自由貿易圏を拡大する必要がある」ことが確認され、米帝の米州全域での新植民地支配政策の強化が一挙に進み始めた。

また一方で、東欧・ソ連や湾岸戦争の被害をうけた中東地域、さらに「世界の成長地帯」と呼ばれるアジア地域などに国際金融資本の投下が高まるなかで、巨大な累積債務と経済危機を抱える中南米諸国は、ますますIMF・世界銀行と国際帝国主義へ奴隷的に従属し、いっさいの矛盾を労働者人民に転化している。IMF・世界銀行の第三世界諸国への「措置」は、ニカラグアに見られるように徹底した緊縮政策の強要であり、社会保障費の削減、企業の民営化・合理化、公共料金の値上げ、そして労働者人民への賃金凍結などの強制である。これらは労働者人民への無慈悲な資本主義的な搾取の強化であり、債務元利の回収によって国際帝国主義は第三世界から超過利潤を収奪するのである。その上、第三世界諸国は、国際帝国主義の直接的な投資を促進して「経済回復と成長」をはからうとし、その結果、国際金融資本にいつそう従属することになる。

国際帝国主義は、こうした新植民地主義支配

ターリン主義の歴史的敗北を突破するために、プロレタリア国際主義のたたかいを基軸にし、国際的な革命運動の相互支援と団結を強固に再建するたたかいに全力をあげねばならない。

を守るために、中南米各国で不可避に増大する反帝民族解放・社会主義革命のたたかいをLIC戦略によってたたきつづそうとしている。中南米における、その最大の焦点こそニカラグアであり、キューバであり、エルサルバドルであった。

この米帝を中心とした国際帝国主義の中南米新植民地支配が進むなかで、今日、日帝がこれに大きく加担し始めた。先に述べた米帝・ブッシュの「米州自由貿易圏構想」に付随した「中南米援助基金構想」では、日米欧がそれぞれ一年間で一億ドルずつ計三億ドルを拠出し、向こう五年間で一五億ドルを「援助」することが打ち出されている。欧州の先進資本主義諸国は東欧・ソ連そして中東への投資のために、この援助構想に消極的となっているが、日帝は中南米への新植民地支配を強化しようとして、無償の「全額援助」にに応じている。今年五月には日帝は、メキシコ、チリへの合計三億ドルの円借款を決定し、ペルー、ニカラグアには「公的債務解消の救済措置」を実施することも決めた。

とくにニカラグアに対しては、継続する革命運動をつぶし国際帝国主義への従属を進めるために、日帝は率先して「援助」し始めた。ニカラグアは、累積債務三四億ドルの返済がまったくできず、IMFや世界銀行、米州開発銀行からの新規融資をストップさせられている。これを「解決」し、親米チャモロ政権のもとでニカラグア革命をつぶすべく、五月中旬に「ニカラグア援助の国際会議」がパリで非公式に行われ、日・米・独・仏・蘭などは延滞債務相当分の三億八千万ドルを出し合い、これによって延滞債務の全額をニカラグアに返済させ、国際金融機関の融資を可能とした。われわれは、日帝の中南米への新植民地支配の拡大と、ニカラグアへの反革命援助を断固弾劾しなければならない。

これら国際帝国主義の経済援助や「自由貿易圏構想」は、借金に苦しむ第三世界諸国を助けるかのように粉飾されている。しかし、それは、すべて国際帝国主義諸国が自己の権益支配圏を拡大するためのものでしかなく、帝国主義が第三世界諸国をサラ金地獄につき落とす国際的茶番なのである。

国際帝国主義が新たにめくろむ中南米新植民地支配の拡大は、中南米諸国人民をすさまじい貧困と生活苦の鎖に縛り、これからの解放を求

める反帝民族解放・社会主義革命のたたかいを激化させていくに違いない。

中南米の反帝民族解放・社会主義革命のたたかいは、国際的孤立と帝国主義の攻勢に直面し、大きな困難のなかにある。だが、人口五〇〇万の中米の小国エルサルバドルでは、FSLNをじて「例外的に前進している」と言わしめたアラウンド・マルチ民族解放戦線(FMLN)の革命運動が強力にもえあがっている。米帝が「一日百万ドル」の軍事援助をすることからうじてエルサルバドルでは、帝国主義と少数資本家・地主勢力の政府が延命している。十数年ものエルサルバドル内戦は、米帝のLIC戦略と全面対決するFMLNのたたかいを決して後退させなかった。そればかりかFMLNは、国土の三分の一を解放区にして、二重権力を国際的に認めさせ、フランス政府など約世界八〇カ国の承認を勝ちとってきた。また去る三月の総選挙では、FMLN革命政府が支配する地域では選挙をさせず、政府軍の支配地域では「民主連合」「国民民主連合」など左翼勢力が大躍進し八議席を獲得した。与党・民族共和同盟は過半数割れとなった。現在、エルサルバドル革命運動の攻勢のなかで、停戦交渉が進められている。FMLNは人民が離反したクリスチアニ政権に対して政府軍の解体を要求し、停戦後の武装組織を保持した政党活動の方針を提起して、米帝の軍事侵略をくじき内戦の終結を進めている。

エルサルバドル革命運動、そして生き残り、新たな革命運動の勝利にむけたニカラグアのたたかいを先頭にして、ラテン・アメリカの反帝民族解放・社会主義革命のたたかいは、より深く人民と結びつき、より強固となっていくに違いない。世界のたたかう人民は、プロレタリア国際主義に立脚し、これらへの国際的支援と連帯のたたかいを進めなくてはならない。さらに、スターリン主義の歴史的な誤りを教訓にし、国際帝国主義の攻勢に立ちむかう新たな持久的対峙の革命戦略をたたかいとり、国際共産主義運動の歴史的な再建に努力しなければならない。さわめて困難なたたかいを強いられるニカラグア、エルサルバドル、さらにはアジアにおけるフィリピンなど、第三世界諸国の革命運動への国際的支援に立ち上がり、プロレタリア国際主義の国際的たたかいを再建しよう。国際帝国主義とたたかい、第三世界の革命に連帯する国際的な統一戦線を、全世界のたたかう人民とともに創出しよう。わが共産主義者同盟(全国委員会)は、こうしたたたかいの先頭に立ち、国際共産主義運動と国際階級闘争の歴史的な再建に踏み出してゆく。ともにたたかわん。